

I. イントロダクション

早稲田大学商学部教授 佐々木宏夫

1

早稲田大学商学部の佐々木でございます。本日は、土曜日という、多くの方々にとっての休日であるにもかかわらず、多数の皆様がこのフォーラムにお越し頂きましてまことにありがとうございます。さらに、ご報告いただく先生方も、皆さんそれぞれにご多忙な中を今日こうしてお越し頂きました事を心から感謝申し上げます。

まず私の報告を始めさせていただく前に、このフォーラムの進行について少しご連絡申し上げておきたいことがございます。お手元のプログラムでは、4人の先生方のご報告が終わった段階で10分間の休憩をとることになっておりますけれども、これですと休憩が少なすぎる感じですので、中馬先生のお話の後でまず一回目の休憩を取り、次に池田先生がお話を終えられた後にもう一度休憩を取るということにさせて頂きたいと存じます。

さて、本題に入らせて頂きたいと存じます。私に与えられた課題は、30分程度でこのフォーラム全体のイントロダクションとなるような話をせよということですが、これはなかなかの難問でございます。力量のある先生でしたら、効率性と公平性に関するありとあらゆる議論をうまくまとめて適切な鳥瞰図を提示することができるのでありましょうが、私の場合残念ながらそれほどの力量がございませんので、これまで経済学の中でも比較的理論的な仕事をして来た人間の一人として、経済学、とりわけ経済理論において、効率や公平などの問題をどう捉えているかということを中心に整理してみたいと思います。

今日お配りしたレジュメはこれからプロジェクターに投影するスライドをそのまま印刷したものでございます。実はこのスライドを用意してから一人で予行演習をしてみましたら、これを全部喋ると1時間くらいかかりそうだということがわかりました。そこで今日は多少カットしながら出来るだけ早く終わられるようにしたいと思います。

経済学で効率性や公平性をめぐる問題は、長い間多くの人々によって議論されてきた問題でございますけれども、この問題を考えるに当たって、経済学ではそもそも効率性や公平性という言葉がどのような意味で使っているのかということをもまず考えてみたいと思います。「スライド2」をご覧ください。ここでは、公平性について、大雑把な分類としまして、事前的な意味合いと事後的な意味合いという分類をいたしました。ただし私は、この分類について、学問的に厳密な意味でこのような言葉遣いをしているわけではございません。したがって、あくまでも直感的な形で理解して頂ければいいかと存じます。

まず、事前的な意味での公平性ですが、これはキーワード風な言い方をすれば「機会の均等（機会の平等）」という言葉で要約されるものでしょう。それに対して事後的な意味での公平性というのは、「結果の平等」、つまり資源が人々の間にある程度等しく行き渡っているか、という経済活動がもたらす成果についての概念だろうと思います。経済学者の多くは、どちらかと言えば事後的な意味合いに関心を持っているのではないかと思います。ただ、そうは言っても事前と事後というのはそもそも相互に関係しあっている概念でございますし、経済学者の中でも、例えば社会選択論の専門家やメカニズムデザイン等々の専門家の方々は、事前的な意味合いにも強い関心をお持ちだろうと思います。ここでは、どちらかといえば事後的な、結果の平等に関する問題を中心に考えてみたいと思っております。

2

ここで簡単に、経済学における効率性の概念を復習しておきたいと思っております。効率性というのは、言うまでもなく資源配分のある状態を表す概念でございます。そこでまず、「資源配分」とは何かをまず説明しておきたいと思っております。資源配分とは、希少な資源がさまざまな経済活動を経て、最終的に誰に帰属する事になるのかという、資源の最終的な帰属状態のことです。これは、パイやケーキをどう切り分けたらよいのか？という例で考えると理解しやすいと思っておりますので、当面は1つのケーキの切り分け方の例で説明して行きたいと思っております。今兄と弟の二人がいて、彼らの目の前にデコレーション・ケーキが1つあるという状態を想像してみてください。このケーキの切り分け方は何通りもあると思いますが、そのような切り分け方の一つ一つが資源配分です。

さて、この二人の兄弟はケーキが大好きで、出来ればそのケーキを独り占めしたいと思っております。しかし、独り占めは許されず二人で分けなければいけない。彼らはそういう状況に直面しているとしましょう。このケーキの切り分け方は、いろいろに考える事ができます。例えば、「スライド4」の左側の絵のような切り分け方も、一つの可能な切り分け方です。これは、兄と弟が三分の一ずつ取って、残りは捨ててしまうという切り分け方です。しかし明らかにこれは、非常に無駄な切り分け方でありましょう。

経済学において、非効率的な資源配分というのは、この図のように無駄が存在している資源配分——パイの切り分け方の状態——のことです。しかし、このような非効率的な資源配分というのは、もう一度切り分け方を見直すことによってより改善した状況に移行させることができます。今考えている図のケースで言えば、捨てようとした部分の廃棄を中止して、兄と弟にもう一度分け与える事によって、「スライド4」の右側の図のような状況が作り出す事が出来ます。このようにすれば、もはや無駄がなくなってしまうわけです。この図のような状況が、「効率的」な配分と呼ばれている状況です。経済学における資源配分の効率性——「パレート効率性」や「パレート最適性」とも言いますが——とは、このような無駄の無い状態を意味しております。

ここで、効率性と非効率性を別の言い方で特徴付けてみたいと思っております。「スライド4」の左側

の図に示されている非効率的な状態においては、人々には自分の置かれた状況をさらに改善する余地が残されています。しかもこの「改善の余地」は、単に「自分が現状よりも良くなる」だけでなく、「自分が良くなってもそれによって他人を害する（悪くさせる）ことがない」というかなり強力な意味合いでの「改善の余地」であります。このように考えると「非効率的な資源配分」を「ある人（＝少なくとも一人の人）が他人を害することなく自分が置かれている状況を改善することができる資源配分の状態」と特徴付けることができますと思います。実際、この図のケースでは、兄も弟も、兄であれば弟の、弟であれば兄の取り分を現状よりも減らす事なく（＝相手を害することなく）自分自身の取り分を増やす事が出来るわけです。これがまさに非効率的な資源配分の特徴であります。

それに対して効率的な配分——「スライド4」の右側の図のような配分——では、たとえば兄が自分の置かれている状況を改善しようとすれば弟に犠牲を強いることになりますし、弟についても同様であります。このように考えると、「効率的な資源配分」を、「誰もが他人を害することなく自分が今置かれている状況を改善できない状況」と特徴付けることができます。

今効率的な資源配分の特徴づけを述べましたけれど、実は効率的な資源配分はただ一通りだけしか存在しないわけではありません。ここで「スライド5」をご覧ください。ここには3つの典型的なケーキの切り分け方が描かれていますが、これらはいずれも無駄が無いという意味で効率的な資源配分となっております。これから2つの問題が生じてまいります。

第一の問題は、市場において一体どのような資源配分が実現されるのか？ということです。もう一つは、社会の利益という観点に立った時に、何通りかある資源配分の中でどれがもっとも望ましい資源配分なのか？という問題です。第一の問題はもう少し後で考えることにして、ここでは第二の問題について少し考えてみたいと思います。

3

この問題を考えるためには、そもそも社会的な望ましさを判断するための基準は何なのか？ということが当然の問題になります。一般的に言って、その種の社会的な望ましさの基準は、それぞれの社会で支配的な固有の価値観、あるいは道徳観などに強く依存しているものと考えられます。例えば戦前の日本社会であるとか伝統的な儒教社会等々においては、年長者への敬いといった種類の価値観が支配的です。そういった社会においてはおそらく、「スライド5」の一番右側の図Cのような年長の兄がたくさん取って弟が少なく取るという配分が社会的に望ましいとみなされるかもしれません。しかし、現代の日本を含む多くの民主主義諸国では、「合理的な根拠がある場合を除いて、社会である人を別の人と異なって取り扱うべきでない」あるいは「合理的な根拠がある場合を除いて、人は社会で皆平等に取り扱われるべきだ」といった価値観が支配的でありましょう。そのような価値観のもとでは、おそらく図Bのような配分の方が望ましいと判断されると思われます。

このように考えてみますと、結局どの配分が社会的に望ましいかということは、社会で支配的な

社会的な望ましさについての評価基準が何であるかということに依存してしまうわけであります。

それではこの評価基準を経済学ではどのような分析的な枠組みで取り扱うか、ということを考えてみたいと思います。これについてはいくつかのアプローチが考えられます。おそらく伝統的でなおかつ直感的にもわかりやすいアプローチは、「スライド6」に書いてあります社会厚生関数のアプローチだろうと思います。つまり経済社会においては個々の人間は、それぞれに自分自身の効用を最大にするように行動しているわけでありますけれども、社会厚生関数アプローチでは、社会というのを一人の人間になぞらえて、個人が効用関数を持つと同様、社会もまたあたかも効用関数を持つ主体であるかのようにみなすわけであります。そしてその効用をできるだけ大きくすることが社会にとって望ましいことなんだと考えるわけです。やや乱暴な言い方をすれば、社会を擬人化して理解してしまうという考え方であるとも言えるかもしれません。そういう意味ではかなり無茶な考え方だと言えないことはありませんが、実際のところこういう考え方というのは我々にとって非常に直感的にはわかりやすい考え方でありまして、われわれは日常的にはけっこうこの考え方と似たようなことを考えることがあると思います。例えば、いまこの国では衆議院議員の選挙が行われておりますけれども、この選挙に限らず多くの選挙で、選挙結果が判明した後に新聞などの見出しに、「国民の審判が下って国民は何々を望んだ」とか「国民は何々を支持しなかった」というような文字が躍るのをよく目にします。しかし、よくよく考えてみればそもそも国民という概念は本来有権者の集合でありますから、個々の有権者がいろいろな考え方を持つことはあっても、有権者の集団があたかも一人の有権者がやったと同様な意思表示をしたかのようにみなすことは少しヘンであります。それにもかかわらずわれわれはこの種の擬人化をよく行なっておりますし、そうすることは選挙結果を直感的に理解するためにはきわめて有効なやり方だろうと思います。

ただし、社会厚生関数のアプローチは、社会を一人歩きする個人と完全に同じのものとみなすわけではございません。社会的厚生というものは、社会を構成する個人の意思を反映したものでなければならぬはずで、「スライド6」の2番目の項目に、社会厚生関数 $W=W(U_1, U_2, \dots, U_n)$ と書いてありますけれども、この (U_1, U_2, \dots, U_n) は、それぞれ個人1、個人2、…、個人 n というそれぞれの個人の効用水準であります。社会厚生関数は、このように社会を構成する各個人が持っている効用を集計する手続きと考えられるわけです。

このように社会厚生関数アプローチというのは、直感的で非常にわかりやすいものですが、これにはいろいろな批判があるわけであります。そのうち代表的な批判を「スライド6」に書いておきましたけれども、もっとも基本的な問題提起は、おそらくアローが提起したものだろうと思います。すなわち、それは、さまざまに異なった個人の意思を、ある種の民主的手続きを経て、論理的な整合性を伴った形で社会全体の意思に集計することの困難さを彼は指摘したわけであります。したがって、社会厚生関数アプローチには、その使い勝手のよさとは裏腹にいくつかの限界もあるのだということを意識しておく必要があると思います。

しかしながら、社会厚生関数アプローチから離れて公平性の問題を考えようとする、いろいろと難しい問題がでてまいります。まず、そもそもわれわれが社会で自分が公平に扱われているかどうかをどうやって判断しているのかについて考えてみたいと思います。多くの人は、自分が置かれている境遇と他人が置かれている境遇を比較する事によって、おそらく公平であるか公平でないかの判断をしているのではないのでしょうか。つまり自分が他人と比べて非常に惨めな境遇に置かれているというふうに考えている人は、この社会は非常に不公平だと思うでしょうし、逆にそうでない人はこの社会は非常に公平だと感じるのではないのでしょうか。

このように考えてみると、自分と他人の境遇を比較することが、公平性を考えるときの出発点になるのかもしれませんが、しかし、一口に「境遇」といっても、そもそも「境遇」とは何か？ということをつっ込んで考え出すといろいろと難しい問題が出てまいります。

例えば、多くの社会では、さまざまなハンディキャップを持った人に対して社会が何らかの援助——年金の支給や医療費の補助など——を行っております。しかしながらよくよく考えてみれば、そういった年金等を支給された人々は、それを支給されなかった人と比べればよりたくさんの財——お金も財の一種だと考えることができますから——を提供されるわけです。つまり財の配分というレベルで考えれば、ハンディキャップを持った人への財の給付は不公平なものなのかもしれません。しかし、現代の社会では、ハンディキャップのある人々に財を給付することが不公平と感じる人はほとんどいないだろうと思います。

それは何故かといえば、ハンディキャップを持っている人々は、例えば歩行や食事といった日常生活における基本的な機能を維持できないような状況に置かれております。したがって、ハンディキャップのある人々はそのような基本的機能を発揮できるようにするために社会からの補助を受けているものと考えられます。そうだとすれば、むしろ基本的機能とか潜在能力がどの程度発揮されるようになるのかという観点で境遇を評価した方が良いように思えます。

この他にも境遇を評価する観点として、ある人と別な人との間の効用水準の違いで境遇が良いのか悪いのかを評価することもできるかもしれません。

こういった問題は、一昨年にノーベル経済学賞をとったアマルティア・センが、詳細に議論した問題であります。ここではそういう問題に深く立ち入るつもりはありませんけれども、ここで申し上げておきたいことは、公平性の概念を経済学の分脈できちんと理解するためにはまずその概念をきちんと定義しなければなりません、実はその定義自体が非常に難しいことなんだということです。

それでは、「スライド8」をご覧ください。これからは、経済学でよく使われている一つの公平性の概念についてお話ししたいと思います。それは境遇の評価を各経済主体の効用関数で行なうこと

によって得られる公平性の概念です。つまり、ある資源配分で、自分が受けている財の組み合わせと、他人が受けている財の組み合わせを自分の効用関数で評価して、自分が受けている財の組み合わせの方が悪い場合にその資源配分は「羨望」を伴う、その意味で「不公平な」資源配分だと考えるわけです。そして、一切の羨望が生じないような無羨望な資源配分があったなら、それを「公平」な資源配分と考えるわけです。

さて、「スライド9」をご覧ください。ここでは、先ほどペンディングにしておきました市場経済が実現させる資源配分の特徴について議論したいと思います。まず、このスライドの最初の項目に「厚生経済学の第一基本定理」と書いてありますけれども、われわれが市場経済の望ましさについて議論するときの第一の出発点がこれであります。厚生経済学の基本定理は、完全競争市場において均衡が成立しているときに、そこで成立している資源配分は必ず効率的であることを主張している定理であります。私たちはよく「市場経済は効率的な経済システムだ」というようなことを言ったり、聞いたりすることがありますが、このような意見は基本的にはこの厚生経済学の基本定理に依拠しているわけであります。

このように、完全競争的な市場経済というものは効率性という点ではなかなか良いパフォーマンスを示していることはわかるのですが、そうなりますと次の問題は、完全競争的な市場経済が実現させる資源配分が、無羨望という意味で公平なものなのかどうか？という問題です。この点についてはこのスライドの最後の項目に書いてありますように、競争均衡は必ずしも羨望なき資源配分を実現させることはできないということであります。

これは恐らく直感的に明らかなことでありましょう。つまりもともとたくさんの所得や財産があるお金持ちとそうでない貧乏な人が市場にいたとします。そのような人々が市場で経済活動を行なって均衡が生じた場合、お金持ちには相対的に多めの財やサービスを配分されるでしょうし、貧乏な人には少なめの財やサービスを配分されることになるでしょう。つまり、市場で効率的な資源配分が達成されることはあっても、所得分配の格差から生じるところの不公平さは、結果として生じる資源配分においても依然として維持されてしまうのです。したがって、市場には効率的資源配分を実現させる能力はあっても、社会の不公平さを是正する能力はないのです。

もっとも今考えているような生産の無い純粋交換経済では、適切な所得再分配政策を実行して、金持ちから貧乏な人への富の移転をしてやれば、均衡で実現する資源配分がある程度公平なものにできるものと思われます。このように考えると、ここで「効率と公平のトレードオフ」の一つの姿が浮かび上がってまいります。言うまでもなく「効率と公平のトレードオフ」では、市場経済の効率性の実現を追及すれば公平性がそこなわれてしまい、反対に公平さを追求すると効率性がそこなわれてしまうという、両者の並立の難しさが主張されております。たしかに一般論としてはそういうトレードオフの存在は予測できるかもしれませんが、どのような形態の市場を考えるのかに応じてトレードオフの具体的な姿はかなり異なったものになる可能性があります。今考えている純粋交換経済の場合には、たしかに効率性と公平性の2条件を同時に満たす資源配分が均衡では必ずしも

得られない、という意味では両者の並立の可能性は一般的には否定されています。しかしその一方で適切な所得再分配政策で対立が解消できる可能性もないわけではないという点を考慮すれば、ここで成立する効率と公平のトレードオフは若干弱い意味合いのものだと言う事が出来ると思います。

しかし純粋交換経済から離れて生産を伴った経済に関心に移した時、もはやこのような弱い意味のトレードオフでなく、非常に強い意味でのトレードオフが成立する可能性があります。これからお話するのは、Pazner と Schmeidler という 2 人の学者が 1974 年に書いた論文——少し古い論文ではありますが——で述べた興味深い例についてであります。（「スライド 10」）彼らは、生産のある経済では、効率と公平のトレードオフは、上に述べた弱い意味ではなくて、非常に強い意味で成り立つことを例示しました。つまり、純粋交換経済では、効率性と公平性の 2 条件を満たす資源配分を実現させる競争均衡が常に存在するわけではありませんでしたが、両者が両立する場合もありました。それに対して、生産経済ではどのような効率的な資源配分も公平ではない、という可能性があり得る事を彼らは示唆したのです。

生産を伴った経済の中では、当然生産活動に際しては労働の投入が不可欠なわけですが、一口に労働と言ってもその質はさまざまです。非常に能力の高い人は少ない労働時間でたくさんのものが作れるでしょうし、それに比べてあまり有能でない人は、長い時間働いてもたくさんのものを生産できないでしょう。つまり社会には有能な人とそうでない人が混在しているのです。このように質的に異なる労働が混在している時に、Pazner と Schmeidler の例では、どのような効率的な資源配分においても、誰かが他人を羨んでしまうという意味での不公平が生まれてことが示されております。

どうしてそういうことがおきるのかを具体的な例で考えてみたいと思います。Pazner と Schmeidler が考えた典型的状況は次のようなものです。社会に能力の高い労働者と能力の低い労働者がいたとすれば、実は能力の低い労働者に働いてもらうのはあまり得策ではないわけでありまして、できるだけ能力の高い労働者に働いてもらったほうがいいかもしれません。つまり能力の低い労働者には遊んでもらって——つまり自分のすべての時間をレジャーのために使ってもらって——、能力の高い労働者にだけ一生懸命仕事をしてもらう。その上で、能力の高い労働者が生み出した成果の一部は能力の低い労働者に分け与える。このようにすると実は非常に効率的な資源配分がもたらされるのでありますが、その一方でこれは不公平感を伴います。つまり能力のある者に「自分はこんなに一生懸命働いているのに何であいつは遊んでいられるんだ」という羨望が生じてしまうわけです。

このような事例というのは、実はおそらく企業にお勤めのみなさんは職場でよく経験されることでしょうし、大学の教員もまたよく経験していることであります。大学教員の例で説明させていただきますと、大学には授業や研究以外にさまざまな雑用的な仕事がたくさんございます。ところが正直言って雑用をこなす能力に関して、教員の中にその能力の高い人と低い人がいることは事実です。そのような現実を前提にしますと、全員平等に雑用的な仕事を割り振ってしまうと、有能な人

に割り当てられた仕事はどんどん進むけれど、そうでない人に割り当てられた人は停滞するという事態が生じて、結局大学の機能は低下してしまうことになります。

それを防ぐためには雑用はできるだけ雑用処理能力の高い人に集中的に割り振って、雑用処理能力の低い人はレジャー——「研究」という名目の——に専念してもらおう。そういう格好でやっていると一応大学はうまく効率的に回っていくようになります。しかし、このように仕事を割り振っていくと当然一方の側に不満がでてくるわけです。たとえば、なぜあいつはしょっちゅう海外で勉強ができるのに、俺はあくせく働かなくてはならないのか、といった類の不満がでてくるわけであります。

それではなぜこのような問題が生じるのか？ということを考えてみますと、「労働」という財が持っているある特異な性質に行き当たります。つまり、労働という財は一般的な財と違ってかなり特異な財で、レジャーと（狭い意味での）労働という二面性を持っています。すなわち労働という財は、狭い意味での労働として生産要素に使われる時には、上述のような質的な差異が非常に大きいわけです。ところがレジャーとして使われている時には、質の高い労働能力を持っている人であろうと、質の低い人であろうとも、等しくレジャーを楽しんでいる。つまりレジャーの消費に関しては質の差は存在しないのです。労働が持っているこのような二面性が、効率的な生産を目指した時に羨望が生じてしまう理由になっているわけです。

このような労働の二面性は、社会のいたるところで観察されていることです。そう考えますと Pazner と Schmeidler が作った例は、単なる例という以上に効率と公平の両立についてかなり悲観的な見通しを示唆していると言えるかもしれません。

効率と公平のトレードオフについては、この他にも多様な論点が考えられますが、もう残された時間もわずかですので、ここでは時間的要素に関する論点だけを簡単にお話しておきたいと思います。これまで私がお話してきたことは基本的には、時間的要素を考えないである一時点における市場均衡を考えるというきわめて静学的な議論でありました。しかし現実の人間は言うまでもなく時間の中で生きているのでありまして、人々は今のことだけでなく将来のことも考えながらさまざまな経済的意思決定をしているわけであります。そして、もしそうであるなら、人が今自分が置かれている状況を公平と感じるかどうかは、資源配分の現状だけではなくて、将来彼が一体何を受け取る事ができるのかという展望にも依存するのではないのでしょうか。

このような観点に立ちますと、たとえば、終身雇用制のもとでの年功序列賃金体系が支配的であったこれまでの日本社会は、見かけ以上に人々の公平感の高い社会であったと言えるかもしれません。つまり、見かけ上の所得分配の格差があったとしても、年功序列賃金体系の下では、現在の高齢者の高所得は、若い人にとって将来の自分の可能性を強く示唆しているわけで、若い人が感じる不公平感はいしたのものではないかもしれません。このように考えてきますと、雇用システムが大きく変化しつつある現在の日本においては、これまでとは逆に仮に見かけ上の不公平感が変わらなかったとしても、なおかつ人々の不公平感は増進する可能性があります。まして、橘木先生から次

に詳しくお話があると思いますが、ジニ係数の増大という形で見かけ上の不平等度が増大している現在の日本においては、人々の不平等度の増大感は見かけ以上のものである可能性があります。このように日本の平等神話の崩壊という現象は、人々の時間的視野まで考慮に入れるとより深刻なものだと言えるかもしれません。

6

だいぶ時間も迫ってまいりましたので、最後に簡単に世代間の公平の話をして頂きます。世代間の公平の話というのは、経済学の中でもかなり長い歴史をもった話題でございまして、「スライド 13」に思いつくままに代表的な文献をいくつか挙げてみましたが、ここに挙げた文献だけでも 1960 年代から最近にまで至っているわけです。この世代間の公平の話は、議論の性質上数学的にかなり込み入った話にならざるを得ない面があります。つまり、社会の中では現在だけでなく未来永劫にわたって無数にたくさんの世代が連綿としてつながっているわけですが、このように続いている世代全体の厚生を評価する社会的選好順序——社会厚生関数と言ってもいいかもしれませんが——を考えるわけです。この厚生関数は通常社会厚生関数と同様、社会全体の利益を反映するものですから、それによって世代間の取り扱いがどの程度公平かという事についての評価も行なわれることになります。先ほども申し上げたようにこの分野の研究は、かなり数学的でテクニカルな研究が多かったように思います。しかし、たとえば Chichilinsky の研究などは、国連の地球環境会議などでも議論された地球環境保護の文脈の中で世代間の公平の概念を見直そうという試みとも解すことができます。したがって、世代間の公平に関する研究は、見かけ上の数学的難解さとは裏腹に十分にわれわれが生活している時代の問題意識にそったものといえます。

ただ、何をもって世代間で公平が保たれていると判断するのかという問題を突き詰めて考えてまいりますと、かなり深刻な問題に行き当たるような気が私自身はしております。そのことを簡単な例で考えてみたいと思います。話を簡単にするため、世の中は 2 期間で終わってしまって、老年世代と若年世代の 2 世代しかいないような社会を考えてみたいと思います。さて、この社会には 2 つの世代を支えるに十分な資源がなく、この社会のあらゆる可能性を動員したとしても一世代の生存しか保障することができないものと仮定しましょう。

「スライド 15」の A 点は、老世代が全資源を消費して、若年世代が死に絶える点であり、B 点は老世代が死に絶えて、若年世代が生き延びる点です。この二つの状態のどちらが社会的に見て望ましい状態なのでしょう？ その場合に世代間の公平に関する一つの有力な考え方に従いますと、A 点も B 点も同じように望ましい——つまり、「無差別」である——と社会的に評価されることになります。そのような考え方の根拠は、この二つの世代を比べた時に、一方の世代が他方の世代よりもより高い価値をもっているなどという根拠が無い以上、どちらの世代の人間も同じ条件の下では同じように評価されなければならない、という点にあります。A 点と B 点は、それぞれの世代の取り分をちょうどひっくり返した配分でありますから、たとえばもし A 点の方が B 点よりも社会的に

望ましいと判断してしまえば、社会は老年世代をより重視していることになってしまいますし、逆にもしB点の方が望ましいと言うことになれば、若年世代を重視していることになってしまうわけです。ですから、どちらの世代も等しく重要だと考えるなら、A点とB点は社会的には無差別でなければならないわけです。このような公平観はそれなりにもっともらしいものでありますし、世代間の公平性に関する多くの文献で導入されている「ダイヤモンドの公平性 (D-e q u i t y)」の概念は今述べたような公平観を一般化したものともいえます。

今までに述べてきた話では、単にA点とB点は共に同じ社会的無差別曲線上にあることを主張するだけでしたが、これに加えて通常の消費者選択の理論で仮定されるような無差別曲線の原点に対しての凸性を想定したらどうなるでしょうか？無差別曲線が原点に対して凸だということは、どちらか一方の世代に偏った消費よりも、両世代の消費量が近づいて来た方が社会的により望ましい、と判断されることを意味しておりますから、これもまたD-e q u i t yとは違った意味での公平性の要請と考えることができるかもしれません。われわれの資源制約の下では、無差別曲線が原点に対して凸であれば、「スライド 15」のA点やB点よりもC点が社会的にみてより望ましいということを意味しております。C点は、両世代が資源を等しく分け合う点であります。そもそも1世代の生存を確保するだけの資源しかないという前提の下では、この点は両世代が共倒れする状況を表しております。つまり、どちらかの世代が生き延びることよりも、わずかな資源を分け合って両世代が共倒れする方が社会的に望ましい、ということをこの図は主張しているわけです。

このように、世代間の公平性の話を突き詰めていきますと、ぎりぎりの資源しか存在していないという状況での究極の選択問題では、こういうかなり逆説的でしかもショッキングな結論が導き出されてしまうのです。これまでに述べてきたのは、あくまでもきわめて極端な例を用いての話であります。実はここで想定した極端な資源制約の想定は、少し時代をたどればわが国でもあるいは世界の多くの国でも経験されてきたことなのです。(あるいは、今でも同様な制約下での苦しい生活を余儀なくされている人々はこの地球上に少なくないでしょう。) 実際、かつての日本の寒村などでは、人々は飢えとの戦いに明け暮れていたのです。そのような中で、たとえば「姥捨て山」の伝説は成立したのでしょうか。その話自体が実話なのかどうか私は知りませんが、十分な食料を確保できない山奥の寒村の人々にとってこの伝説はかなりのリアリティを持って語り継がれてきたものと思われまます。

姥捨て伝説が現実味を帯びてくるような、資源の渴望した社会で行なわれる究極の選択は、「スライド 15」に描かれているようなものではなくて、恐らく「スライド 16」に描かれているようなものであったと思われまます。つまり、そこでは若年世代の生存を確保することで得られる世代間の継続性の維持が世代間の公平性に優先する原理とする社会的な合意が成立しているものと思われまます。(ただし、正確な言い方をすれば、われわれが今考えている例では、そもそも世界は2期間で終わってしまうわけですから、そこに世代の継続性の原理が入り込む余地は厳密にはありません。いまここで申し上げていることは、「この例の自然な拡張としてこういう解釈も可能なのだ」とい

う意味合いで理解していただければ幸いです。)

このような社会選択はたしかに悲劇的なものではありますが、多くの社会がこのような悲劇的な選択を経験してきたことは事実でありますし、実は現代の日本においてすら、われわれは形を変えた同種の究極の選択問題に直面しているように思えます。

つまりわれわれは、それを例えば医療保険や介護保険に関する問題の中に見出すことができるかもしれません。われわれの社会では、医療技術の進歩の結果、高額な医療費負担と引き換えにこれまで以上に人々が生き延びるチャンスが増してまいりました。さらに医療技術の進歩に加えて、社会の豊かさが増進するにつれて人々の平均的な寿命も順調に伸びてまいりましたが、その一方で高齢化の進展に伴って、介護を受ける必要性のある人々の数も増えております。ところが問題は、高額な医療費や介護に要する資金を負担するだけの能力が社会に十分に備わっていないことです。もちろん、国家予算のすべてをそこへ投入するとか、国民の税負担率を極端に重くしたりすればこの問題は一応解決できるかもしれませんが、政府がなすべき仕事は医療や介護に関することだけではありませんから、そういった解決策は言うまでもなく現実的ではありません。

そう考えますと実は医療保険や介護保険などをめぐる問題の背後には、さきほど述べた究極の資源制約にかかわる問題と同等なものが存在している可能性があるように思えます。ただし、私は今ここでこれに対する答えを提案するつもりはございませんし、また答えるための十分な能力もございません。ただ、少なくともはっきりと言えることは、われわれはかつての姥捨て山の発想でこの問題を解決してはならないということであります。われわれは、姥捨て山伝説がリアリティーを持って語り継がれてきた時代よりもいろいろな意味ではるかに成熟した時代に生きております。われわれは、今後知恵を出し合ってこの問題をどう解決するのかを一生懸命考えていかなければならないと思います。そのような問題提起をして、私の報告を終わらせて頂きたいと存じます。

7

さて、ここで今日ご報告頂く先生方について、簡単にご紹介させて頂きたいと存じます。

まず、次に最初のご報告者としてお話頂きますのは、京都大学経済研究所教授の橘木俊詔先生でございます。橘木先生は、米国のジョンズ・ホプキンス大学で博士号を取得され、現在京都大学教授であらせられます。ご専門は労働経済学でございますが、ご専門の労働経済学のみならず非常に幅広い実証研究の分野で優れた研究論文を書いておられます。一昨年、先生が岩波書店から出版された『日本の経済格差』は、専門家だけでなく一般の皆さんにも大きな反響を巻き起こし、ベストセラーとなっております。

その次にご報告頂くのは、一橋大学イノベーション研究センター教授の中馬宏之先生でございます。中馬先生も労働経済学者でいらっしゃいます。中馬先生は、ニューヨーク州立大学バッファロー校で博士号を取得されました。その後、東京都立大学、一橋大学経済学部を経て、現在は一橋大学のイノベーション研究センターの教授をしておられます。中馬先生も非常に優秀な研究者でいら

っしやいまして、一流の学術雑誌に論文を発表されると共に、近年は実際の労働現場における聞き取り調査などのケーススタディーにも精力的に取り組んでおられます。

3人目のご報告者は、東北大学大学院文学研究科教授の川本隆史先生でございます。川本先生は倫理学者でいらっしゃる、特にジョン・ロールズのご研究に関しては間違いなく日本の第一人者でございます。日本の多くの哲学者や倫理学者の皆さんには失礼な言い方かもしれませんが、どちらかと言うと私のイメージでは、哲学者や倫理学者の皆さん方は、書齋にこもって難しい文献を読むことに専念されていて、現実社会の出来事にはあまりご関心が無い方が多いような感じするのですが、川本先生は非常に例外的な倫理者であらせられて、倫理学をいかに現実の社会問題を理解したり解決したりするために使ったらいのかと言う事を常に意識しながら研究をしておられます。私事で恐縮でございますが、私は先生の本を読ませて頂きまして大変感銘を受けましたので、ぜひとも直接お目にかかってお話をうかがいたいと常々思っておりました。したがって本日こうして先生のお話をうかがえることは個人的にも大変嬉しいことでございます。

4人目のご報告者は大蔵省主税局調査課長の池田篤彦さんでいらっしゃいます。大蔵省にはいろいろな部局がありましてそれぞれに特徴をもっておりますが、その中でも税に関するさまざまな制度を設計する役割を持っている主税局は、間違いなく大蔵省の頭脳集団だと思います。池田さんはその主税局の調査課長、つまり調査研究の責任者でいらっしゃいますから、まさに大蔵省の知性を代表するホープの一人でございます。

以上、本日ご報告いただきます先生方をご紹介申し上げましたが、このような一流の先生方のお話をうかがえることは私にとりましても大きな喜びでございます。

それではまず、橋本先生、よろしくお願い申し上げます。

日本における効率と公平

「平等神話の崩壊」をめぐって

早稲田大学 佐々木宏夫

1

公平性の考え方——事前と事後

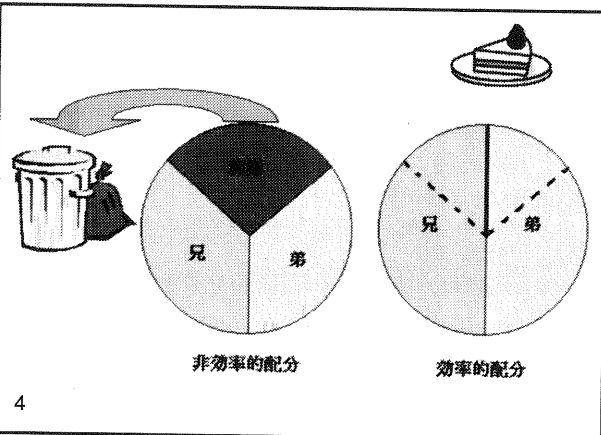
- 事前的な意味
 - 手続き上の公平性
 - 公平な制度・ルール
 - 戦略的操作性の問題...
 - 「機会の均等」、など
- 事後的な意味
 - 公平な資源配分
 - 「結果の平等」、など

2

経済学における効率と公平 —— 概観

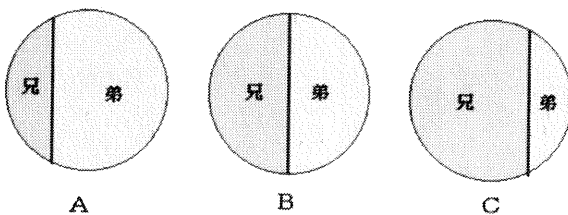
- 非効率的な配分と効率的な配分
- 公平な配分
- 効率性と公平性は両立するか？

3



4

どれが公平？



5

社会厚生関数アプローチ

- 個人の効用を集計して社会全体の厚生水準を評価できるか？
- 社会厚生関数 $W = W(U_1, U_2, \dots, U_n)$
 - 功利主義的、Nash的、Rawls的、...
- 社会厚生関数アプローチへの批判
 - 効用の基数性
 - 社会選択論の視点、など

6

個人間の「境遇」の比較

- ※ 「境遇」を何で評価するか？
 - ※ 配分される財・サービスの水準？
 - ※ 機能や潜在能力の水準？
 - ※ 効用水準？

7

「羨望」アプローチ

- ※ 他人の「境遇」の評価に際して、他人に配分されている財・サービスを自分の効用関数で評価する
- ※ Foley(1967), Kolm(1971), Varian(1974), ..., 等々

8

羨望なき資源配分

- ※ 厚生経済学の(第一)基本定理
 - ※ 競争均衡下の資源配分はパレート効率的である
- ※ 羨望なき資源配分
 - ※ 誰もが自分が現状が他人の現状よりも悪いと感じない資源配分の状態
- ※ 競争均衡配分は、必ずしも羨望なき状態を実現させない
 - ※ 平等な初期配分から出発した競争均衡は、効率的かつ公平(無羨望)である

9

生産を伴った経済における公平性

- ※ Pazner and Schmeidlerの例
 - ※ 生産を伴った経済では、パレート効率的な資源配分がすべて「不公平」になることがある → 効率性と公平性の両立がむずかしい
 - ※ 2種類の労働能力: 「質の高い労働」と「質の低い労働」
 - ※ 典型的な効率的配分の形態: 質の高い労働者だけが労働に特化して、その成果を分け合う ⇒ レジャーは等質な財であるが故に労働に従事する者の不公平感が高まる
 - ※ ポイント: レジャーと「労働」の二面性

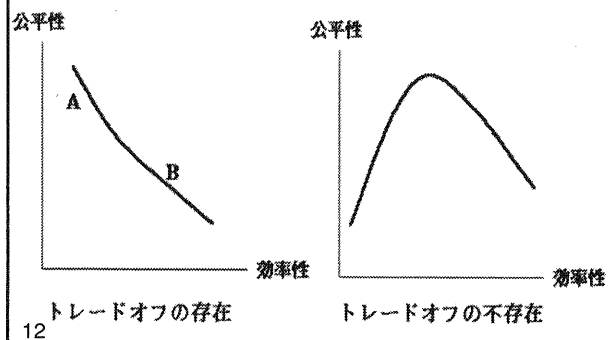
10

「効率と公平のトレードオフ」の諸相

- ※ 「トレードオフ」の4つの意味(夢沼(2000))
 - ※ パレート最適かつ公平な資源配分が存在しないことがある
 - ※ 効率性基準ではより望ましい資源配分が、公平性基準ではより劣ることがある
 - ※ 効率性優先原理での順序付けでは、最適性の判定ができないことがある
 - ※ 公平性優先原理によって最適でありながら効率的でない資源配分が存在することがある(⇒ 「公平性のわな」)
- ※ 静学的観点と動学的観点

11

効率と公平のトレードオフ



12

世代間の公平をめぐって(その1)

- ※ 世代間分配の評価基準
 - ※ 「倫理的選好順序」の存在問題
 - ↓
 - ※ Sustainable Developmentの視点も加わる
- ※ 代表的文献
 - ※ Diamond(1965), Svensson(1980)
 - ※ Chichilinsky(1996), Shinotsuka(1998)
 - ※ Sakai(2000)

13

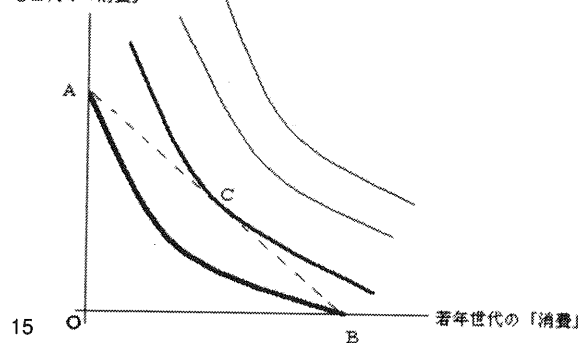
世代間の公平をめぐって(その2)

- ※ “D-equity”=「匿名性」の要請
- ※ 匿名性、分配の正義、資源制約
 - ※ 難破船問題
 - ※ 「姥捨て山伝説」
 - ※ 介護保険と老人医療問題、など
 - ↓
- ※ 倫理的選好順序は資源制約から独立でないのかもしれない？

14

「匿名性」と資源制約

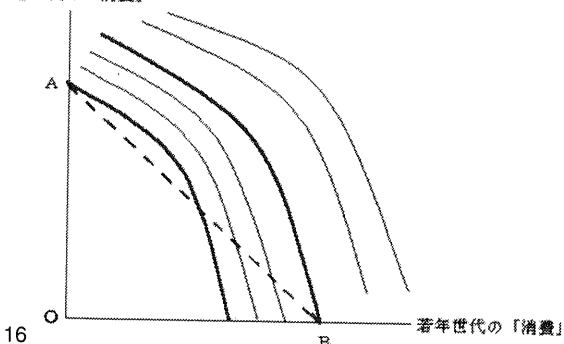
老世代の「消費」



15

「匿名性」等の欠落

老世代の「消費」



16